

歌集

純 林

山下陸奥著

人 文 書 院

山下陸奥著

歌集
純林

一路叢書



昭和二十三年七月五日印刷
昭和二十三年七月十日發行

歌集 純林 定價 百二十圓

著者 山下陸奥

刊行者 渡邊久吉

印刷人 鈴木直樹

發行所 京都市東山區 人文書院
高臺寺北門西

電話 祇園一八〇八番
會員 番號 二一〇〇〇三番

純林目次

昭和十八年

交換船帝亞丸

房總海岸

露霜

雜歌抄

昭和十九年

荒磯

一

三

六

九

二

奥日光……………三

昭和二十年

疎開……………一〇

北信濃神郷村……………三

終戦……………一六

九月……………三〇

稻の花……………三

林檎園……………三

黒姫山麓……………七

秋雑吟……………四

昭和二十一年

千曲川……………四

越後の海……………四七

別離……………五三

長野市數日……………五五

等等力舊居……………五七

早春居常……………六〇

伽羅木……………六三

逝春抄……………六六

足利……………七三

佐佐木信綱先生	一五
初夏日日	七七
百日紅	八四
諸相	八七
茅蝸	九〇
新秋小吟	九六
中國路	九八
備後	一〇一
赤名峠	一〇七
豐前	一一〇
小生活片	一二六

昭和二十二年

伊豆 一九

家庭抄 二六

存在 二九

街上 三四

小庭錄 三六

微光 四〇

肯定 四四

甲斐右左口峠 四六

塵埃 五〇

主張	一五
上ノ山温泉	一六
立石寺	一六
松島	一七
極東軍事裁判	一七
晩夏吟	一八
日常雜歌	一八
海潮音	一九
川崎・横濱	一九

交換船帝亞丸

二萬里の八潮路こえて天皇の寫眞も今は還り
たまへり

ブラジルより歸りし友はわれのつぐあたたか溫き茶を
幾杯にても飲む

宮城を拜して歸り言ふことはなし言ふことは
なしと涙をふく

國國のことには觸れず日本の民と生れしこと
のみを言ふ

荒れに荒れて紅葉下照る公園を歸朝の友とし
づかにあゆむ

房總海岸

磯ちかく灌木が覆ふ浅谷は苔も生ひざる石う
づたかし

落葉せる谷浅くして奥の邊の崖に青青と菅ぐ
さ垂れぬ

有磯にて氷砂糖の幾いく飲かひを譲りあひつつ妻と食たべけり

沖の邊の深き曇りににじみたるかそけき朱あけは幾人いくたりか見む

渚邊の大き鴉は砂の上の月の光をうちてたちたり

弘法麥枯れし砂丘の一面ひとおもに傾きかけてまともなる月

この海を慕ひて一度いちど來し友も常親しみし友もむなしも 唐戸丑太郎・目良功

ひろがりて砂にしみ入る泡沫のそのつぶやきに何を求めむ

露

霜

魂魄となりましぬれば寂かにて池の水に日の
あたるなり 名和盛子

庭の落葉の深きに立ちて居りしかば後の方に
人の近づく

寒寒と朝あけてゆく庭のべに生ける夫婦の息
のうとまし

露霜のおきたる石に朝の日のさすころ君は炎
とならむ

幾人の子を先だてて今日また子の葬に裕然と
坐りゐたまへり

人の死に一夜を空^あけしわが家の小^{ちい}さき錠をあ
けて夫婦入る

かへり來て妻と飯^{めし}を食ふ人の死ぬ前に炊^たきた
る冷えきりし飯^{めし}

○

孤兒^{みなしこ}となりたる君の右左^{みぎひだり}夫婦^{われら}坐りてものをす
すむる